

第一章 健太のマッサージ

健太が車を運転している。それが凄く新鮮だった。

幼馴染の運転する車は、何処までも行けそうな気がしてくる。山の上の入道雲が、私をもっと遠くへ行こうと誘う。

「健太が運転してる！」

健太は得意げに言った。

「凄い？」

「すごい！」

それから私達は、山の展望台に行って風景を眺めた。蝉が鳴いており、夏真っ盛りであることを改めて告げて来る。

「うちの町。ちっちゃいねえ」

「ああちっちゃい。俺も東京行きたかったな」

「そう？ 私はこの町が好きよ」

「そっか？」

帰れば健太がいる。もし健太もどこかの大学に行っていたら、帰ってきてても会う事は出来なかったかもしれない。さっきまではそんな事を

思いもしなかったけれど、何故かあのDVDを見た時から健太を意識してしまっていた。

そして二人が車に乗り来た道を戻ると、森林公園に差し掛かった。そこはフィールドアスレチック場になっていて、子供の頃は健太と一緒に親に連れられてきた記憶がある。

「懐かしいね！」

「ほんとだな！」

「やっていこうよ」

「よし」

二人はデニムパンツにTシャツだし、少しくらい汚れても問題の無い恰好をしていた。そして二人はフィールドアスレチックで遊び始める。ターザンロープやうんていをやり、次にネット登りを始める。だけどそれを始めて、私は健太の視線に気が付いた。

なんか私を観察してる？

気のせいだろうか？ 健太の視線が絡みつくような気がしてくる。集中力を欠いた私は足を踏み外し、ネットから手を放してしまった。

「わっ」

だけど、しっかりと健太が私を受け止めてくれた。

「あつぷな！ 雫。気をつけろって」

「ごめんごめん」

「ただ健太はすぐに私を離さずに、じっと見つめて来る。足がネットに絡まってるが、ゆっくりとロープを握って上体を起こした。」

「あ、もう大丈夫よ」

「怪我はないか？」

「ない」

「ならいいんだ」

私はさつき見たDVDのせいで、思わず健太を意識してまう。健太の言葉や、健太の仕草も視線も全部が気になってしまうのだ。

「汗かいたし、なんか飲みにくいよ」

私が言うと、健太は優しい笑みを浮かべて言う。

「いいよ」

「うん」

「ほら、降りろ」

もう一度、手を差し伸べて来た。

何か……子供の頃にも、こんな風に手を差し伸べられたことがあったっけ。健太は、今もあの時のままなのかな？

さらさらと風が吹き、山の草木を撫でていく。思わず私が健太に聞いた。

「ねえ。なんで彼女作らないの？」

「はあ？ 別にどうでもいいだろ」

「気になるじゃん」

「なんで雫が気にするんだよ？」

「まあ、幼馴染として？」

「そっちはどうなんだよ」

「私は別に、学校も忙しいし彼氏とか考えてないかな」

「んじゃ、おんなじだよ」

「なにそれ。ずるい」

「ずるくないよ」

二人は目を合わせ、次の瞬間思わず笑ってしまった。

「あはは。昔のままじゃん」

「だね。子供の頃もこんな言い争いしたっけ」

「したした」

二人は車に乗り込み、コンビニでペットボトルを買って飲んだ。すると今度は健太が聞いて来る。

「東京はどうだ？」

「なんかごちゃごちゃしてる」

「そっか。隼はもうこっちには戻ってこないんか？」

「分からないわ。まだ一年生だし、就職もなにも全然考えてない」

「まあ、だよな」

「健太は？」

「どうすっかな。金かかるから大学は地元って親に言われたけど、働きたしたら自由だよな？」

「そうだよ」

すると、私を真剣なまなざしで見つめ健太が言った。

「隼が東京に就職するなら、俺も東京出ようかな」

「えっ。私、関係ある？」

「あ、あるよ。東京を案内してもらわねえと、俺迷っちゃうだろう？」

「プッ！ そんな理由？」

「そうだよ」

二人はコンビニの駐車場で、なんとなく音楽なんかを聴きながら静かに過ごす。これも幼馴染の二人ならではの過ごし方で、特に気を使う事は無いと思っていた。昨日までなら普通りで、本当に気にする事は無かったと思うけど、今は健太の一言一言が気になって仕方がない。

「健太を案内してあげるよ。それまでに東京に詳しくなっておく」

「本当か？ 期待してるぞ？」

「この約束を私が覚えてたらね」

「ひでえ、忘れたら無しかよ」

そんな事を話しながら、私は子供の時のように小指を差し出す。

「仕方ないなあ。約束してあげる。ほら」

「わかった」

二人で小指を絡めた。彼の手は大きくて、温かくて。だけど、妙に力強く感じた。なぜか私の心臓が跳ねあがる。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます。指切った！」

なんか変。キュンキュンしてる？ 相手は幼馴染の健太なのに？ なんでこんなに意識しちゃってるの？

なんで自分がそうなるのかは分からないが、健太の事が気になって仕方がない。

「そろそろ帰るか」

「うん」

家に帰って、玄関を開けるとお母さんが聞いて来る。

「お帰りなさい。健太君、そうめん食べるわよね？」

「あ。食います」

私と健太はリビングへと上がり、お母さんがそうめんを作って持って来た。

「どうぞ」

「頂きます」

そして二人でそうめんをすすりつつ、私はチラチラと健太を見た。子供の頃から、こうして一緒にご飯を食べたりした事を思い出す。

「あなた達、変わってないわねえ」

「そんなことないわよ」

「二人並んでそうめん食べて、こんなシーンを何度見て来たかしら」

「すみません。うちの両親が帰るの遅くて」

「いいのよ！ そうめんぐらいでそんな事言わないでいいの」

そして私も言う。

「そうよ健太。べつにいいじゃない」

「俺も、雫ん家が家みたいになっちゃてました」

「なにいつてるの。健太君は遠慮せずに、いつでも来ていいのよ」

「ありがとうございます」

そうしてそうめんを食べ終わり、二人で二階の私の部屋に行く。

「熱っっ」

そう言って私がエアコンの冷房を押した。冷たい風が吹き込んできて、二人で床に座って扇いでいる。すると健太が言う。

「いつまで雫と、こうしてられるんだろうな？」

「えっ？ 何よ急に。夏休み中は、ほとんどいるわよ」

「そうじゃなくて、この先ずっとの事」

どきん……、確かに私も考えていなかったわけじゃない。でもあまり考えないようにしていた。

「なによ。さつき指きりげんまんしたじゃない」

「そうだな。ははっ」

何か……いつもの二人じゃない感じ。気まずいので学校の話題などを持ちかけてみる。

「健太の学校の勉強は大変？」

「結構いっぱいいっぱいだな」

「理学療法士になりたいんだっけ？」

「そう」

「えー、じゃあマッサージとか？」

「それもあるけど」

「どんな？」

「まだほとんど座学でわかんねえよ」

「やってみてよ」

「……」

「いいじゃない。幼馴染なんだし」

「医者 of 許可なくマッサージは違法なんだぜ」

「ここで、違法とかあるわけないじゃないの」

「仕方ねえなあ。んじや仰向けに横になれよ」

言われたとおりに上を向いて寝そべる。すると健太が膝から腰にかけて、デニムパンツの太ももを摺り上げるようにマッサージして来た。

「療法士がしているのを見たのはこんな感じだよ」

「ふーん。悪くないわね」

太ももに触れている健太の眼差しに、熱いものが見え隠れしているみたい。そしてその手が、股間の方に上がってきて鼠径部をマッサージし始める。一瞬声が出そうになったけど、辛うじて堪えた。そして健太が言う。

「でも、これがいいのかどうかも分からないぞ？」

「悪くないみたいよ」

「そうか？」

「向いてるんじゃない？」

「てか、二人でこんな事してるの、なんか恥ずかしくねえか？」

「なによ。小さい頃はお風呂に入った仲じゃないのよ」

「ありや子供の時の話だろ？」

「変わらないって」

と、言いつつ。平静を装っているつもりが、私の心臓はめちやくちやドキドキしていた。私は仰向けになりながら下から健太を見上げ、健太は太ももを擦りながら私を見ている。

「乗が帰ってきてくれて嬉しい。夏休みは、ずっとあっちにいるのかと思った」

「だって、食費もかさむし」

「なるほど」

そしてマッサージはスルスルと足もとに下りていき、突然健太が吹きだす。

「ぶっ」

「なによ」

「クマのキャラ好きだよな」

私は普段着なので、クマキャラクターの靴下をはいていた。

「いいでしょ。別に」

「……いいけど」

そして健太が、下から私を見上げて言う。

「腹ばいになって」

「あ、うん」

今度はふくらはぎを掴んで揉んできた。

「あ、気持ちいい」

「そうか」

じつくりとふくらはぎを揉み、それがゆつくりと太ももに上がってきた。見よう見まねとか言ってたけど、心地よいマッサージ。それがスルスルと上がってきて、健太が私に聞いて来る。

「普通はおしりもするんだけど、ここまででいいだろ？」

私は健太の真意が知りたかった。さっき見た、DVDのパッケージ。あれが私をイメージしている物なのか、たまたまなのかを知りたい。

「やってよ。昔はじゃれてたじゃない」

「雫が良いならいいけど」

そして健太はお尻に手を当てて、むにゅむにゅとマッサージを続けている。部屋はクーラーで涼しいはずなのに、私はまだ汗ばんでいた。

「もう疲れたでしょ？」

「いや。そんなでもないけど、デニムパンツが硬くてなかなか揉みづらいな」

「直だとやりやすいの？」

「普通はそうだ」

「じゃ、下ろす？」

「えっ……」

「やりやすいんでしょう？」

「えっと、そうだな」

私はデニムのボタンを外して、するりと下げてパンティのお尻をだした。

「ほら」

「おま……少しは恥ずかしさというものをだな」

「別にいいじゃない」

「まったく」

健太はパンティ越しに、私のお尻をマッサージして来た。マッサージはお尻から股関節に移る。

「あー。確かに直接だと気持ちいいわ」

「……」

「健太？」

何故か健太は黙ってしまった。腹ばいになっているので表情は分からないが、その手は太ももの付け根を掴んでゆっくり揉んでいる。

「どうしたのよ？ 静かになっちゃって」

「雫……あの」

「ん？」

「触っていいか？」

「ずっと触ってるじゃない」

「いや、あの。もっと気持ちいい所をマッサージしていいか？」

「マッサージ？」

「えっと……そう。マッサージ」

「遠慮しないで練習台にしてよ」

「……」

そして次の瞬間。

さわっ。

「あっ」

パンティの上から、股間のあたりに触れた。

「このあたりをマッサージしていいか？」

「べ、別にいいけど。それが練習になるなら」

すりすり。

健太は私のあそこを、パンティの上から撫でた。